

種生物学会 News Letter No. 7

種生物学会 The Society for Plant Species Biology Oct. 20, 1991

第 23 回 種生物学 シンポジウム

第23回種生物学シンポジウムは1992年（平成4年）1月24日（金）～1月26日（日）の3日間、松本市のみやま荘で行われます。今回は従来のシンポジウムに加え、ポスター発表を行ないます。参加申込など詳しい情報は別紙を参照下さい。

◎プログラム

1月24日（金）

14:00～18:00 編集委員会・幹事会

プレシンポジウム

19:00～21:00 ミツバチ科ハナバチの送粉生態学

井上民二（京大・生態学研究センター）

1月25日（土）

シンポジウム I

進化生態学の論理と展開：さよなら種生物

9:00～10:15 進化生態学の論理と種の利益

柏谷英一（新潟大・教育・生物）

10:30～11:15 Sex allocation 理論の植物への適用

山口陽子（北海道立林試）

11:15～12:00 繁殖戦略としての受粉様式—風媒花

と動物媒花における Pollen flow

西脇亜也（東北大・農・草地研）

13:00～13:45 アカザ属における種の共存と排除

館野正樹（農工大・農）

13:45～14:45 植物の生活史戦略に関するゲーム理論を用いたアプローチ

酒井聡樹（農水省・草地試）

酒井聡樹（農水省・草地試）

15:00～16:00 総合討論

総会

16:00～17:00

懇親会およびポスター発表

18:30～21:00

1月26日（日）

シンポジウム II

植物進化学での分子進化学的アプローチ

8:45～9:45 分子進化学と植物進化学

村上哲明（東大・理・植物園）

9:45～10:30 モクレン科における形質進化

植田邦彦（大阪府大・総科）

10:40～11:25 ラン科の栄養器官における形質進化

遊川知久（千葉大・理）

11:25～12:10 アケビ科の形質進化と生物地理

小藤果美子（金沢大・理）

13:00～13:45 キク科における網状進化の解析

伊藤元巳（都立大・理・牧野）

13:45～14:30 フィンガープリント法による果樹の

品種選別

寺内さゆり（農水省・果樹試験場）

14:45～15:30 総合討論

◎シンポジウム企画の趣旨

○シンポジウム I

「進化生態学の論理と展開：さよなら種生物」

酒井聡樹（農水省・草地試・草地生態）

近年、生物の様々な性質の進化は個体の利益から説明されるものであり、種の利益から説明されるものではないという考え方が受け入れられてきています。しかしこの考え方は、日本の植物学の研究の現場では十分な理解が得られていないようです。たとえば、河野（1991）は「動物の地球」の中で、（植物と動物の）「相互依存関係の分化が進むと、もはや一方の生物が他方の存在なしには種族維持はおろか、個体の生命維持すら確保できないような特殊な段階へと到達する」と述べています。この企画は、進化生態学の論理と展

開を紹介することにより、個体の利益を基盤とした進化生態学的な考え方の有効性を訴えることを目的とします。「種生物学」から脱皮しようということが狙いであって、「種生物学会」をやめようというものではありません。本学会のさらなる発展のため、けじめをつけておこうとするものです。

○シンポジウムⅡ

「植物進化学での分子進化学的アプローチ」

長谷部光泰（東大・理・植物園）

酵素多型、DNA多型を用いたいわゆる分子進化学的方法は動物を中心に進展してきましたが、この10年程の間に植物進化学の分野でも着実に成果を挙げつつあります。方法論については国内でもいくつかのシンポジウムで議論され、一応のコンセンサスが得られ、技術的にも定着してきたように思われます。今回は実際に分子進化学的方法で得られた結果を各研究者の方々に話題提供していただき、分子進化学的方法がどこまで有効なのか、なにがわかるのか、なにが足りないのかをご議論頂ければと思い企画いたしました。東京大学理学部附属植物園の村上哲明さんにはご自身のシダ植物を用いた研究を例に分子進化学全般についての導入をしていただきます。植物進化学で現在最も広く用いられ、大きな成果をあげているのは葉緑体DNAのRFLPsから系統樹を構築する方法だと思います。構築した系統樹を使って、大阪府立大学総合科学部の植田邦彦さんにはモクレン科、千葉大学理学部の遊川知久さんにはラン科における形質進化等、これらの分類群において推定された進化の道筋について話題提供していただきます。金沢大学理学部の小藤累美子さんにはアケビ科を材料として、形質進化の議論と共に生物地理学的考察をしていただきます。東京都立大学理学部牧野標本館の伊藤元巳さんにはキク科における網状進化の例を紹介していただく予定です。また、葉緑体DNAでは不可能な集団内変異の解析、個体識別に大きな効果を発揮すると期待されているフィンガープリント法について農水省果樹試験場の寺本さゆりさんに話題提供していただきます。

◎ポスター発表

従来のシンポジウムに加えて、今回ポスター発表を試行的に行うことにしました。ポスターの展示場所はシンポジウム会場を共用し、会場の壁面を利用して展示スペースを設ける予定です。展示スペースは一人当たり縦180cm × 横90cmを予定しています。最大40～50名程度まで展示することが可能です。

展示期間は1月24日午後から1月26日正午まで。また、1月25日の夕方に（懇親会と平行して）展示の説明の時間を設けます。すなわち、展示の説明を酒の肴に、立食形式の懇親会を行う予定です。

毎年のシンポジウムにマンネリ感を感じ始めているあなた。ポスター発表を申し込んでリフレッシュしてみませんか。

参加申し込み先

〒390 松本市旭3-1-1

信州大学教養部生物内

第23回
種生物学シンポジウム準備委員会

代表 井上 健

参加締め切り

1991年12月15日

<編集後記>

本学会の主事業の1つであるシンポジウムの開催案内をニューズレターとしてまとめてみました。意見など種生物学研究やニューズレターの原稿とともにお届け下さい。（山口 裕文）

種生物学会ニューズレター第7号

発行 種生物学会
編集 種生物学研究編集委員会
〒606 京都市左京区北白川追分町
京都大学理学部植物分類学研究室内